『日本経済新聞』1997年11月30日朝刊、p.18.

新宿中村屋 相馬黒光

宇佐美　承著

芸術家らを支えた女主人の評伝

世に「メセナ」（企業の文化支援）なる言葉が流布して久しいが、本書はまさにその先駆け、新宿「中村屋サロン」の女主人相馬黒光（本名・良）を描いた初めての評伝である。しかし本書は荻原守衛、中村彝、津田左右吉、会津八一など、実に様々な芸術家や学者が出入りしたパン屋の一代記と、それをめぐる文化状況を単にエピソード豊富に綴っていくのではない。

著者の力点は、維新に敗れた仙台藩の儒者の孫娘が、キリスト教の女子教育を受け、信州穂高の素封家に嫁ぎながらも、夫と共に東京に出奔し、いかにしてパン屋の経営に成功し、多くの芸術家たちを惹（ひ）き付けていったか――そのダイナミズムを捉えることにこそ置かれている。

若い頃、彼女の余りの才気のひらめきに、「光は押さえてこそ人に受け容れられる」と、師厳本善治が「黒光」というペンネームを与えたほどの女性である。その生涯は文字通り波乱万丈、インドや朝鮮半島の民族独立運動の活動家を匿（かくま）う勇気を示す一方、大東亜共栄圏のまやかしを見抜くことは遂にできなかった。

著者は、相馬黒光が後年（主に口述筆記で）まとめた自叙伝を一次資料としながらも、常にその内容や文体と一定の距離を保ちつつ、彼女の生きた時代を再構築する。とはいえ「人物を歴史的に評価するとき、今日からみて何が足りないかという見方ではなく、その当時において何をつけ加えたかという視点が必要なのです」（中野重治）という基本姿勢を宇佐美氏が引用する時、それは黒光という人物への愛着を何よりも物語っているだろう。

黒光を含め本書に登場する明治生まれの女性たちが、男性同様才能や時代の限界に阻まれながらも、思いのほか奔放でしなやかに生きていたということに、改めて驚かされる。前著『池袋モンパルナス』同様、芸術家と時代や思想との関係を扱った本書は、相馬黒光という女性の軌跡に焦点を絞ったことによって、端正な〈評伝〉という風格を備えるに至っている。集英社・二、八〇〇円。

（筑波大学専任講師　今橋　映子）

（うさみ・しょう）　一九二四年中国・天津生まれ。東京大学を卒業後朝日新聞社に入社。社会部記者などを経て記録文学作家に。著書に『さよなら日本』など。